

オナニーのマンネリ化に危機を覚えた私が、何かいいネタはないかとネットサーフィンしているときだった。

「壁尻体験…？」

それは風俗系のサイトをサーフィンしているときに出てきた広告。

文字のインパクトに思わずタップした先は、壁尻体験ができるというハプニング的なお店のサイトだった。

壁尻。

壁に挟まった(主に)女性が身動きの取れない状態でちんぽで突かれたりするシチュエーション。

漫画でしか見たことがない。

「こんなことまでできるところあるんだ…」

好奇心に駆られた私はオナニーも忘れてベッドで寝返

りを打ちそのサイトを読み進めた。

「——では、荷物はこちらのロッカーにお願いします。  
預けられましたら下着の状態でこちらの部屋に進んでく  
ださい」

「はいっ」

一週間も経たないうちに私はそのお店に来ていた。

昼間だというのに薄暗い店内。

カウンターにいる無愛想な若い男性に一通り説明を受  
けて私はバッグや服をロッカーに預けると、案内された  
通りにもうひとつ奥の部屋へ移動した。

そこは六畳くらいだろうか、壁際に簡易的なソファと  
テーブルが置いてあるだけの小さな部屋だ。奥の壁の真  
ん中には穴が空いていて、その壁の隅にはドアがあった。

どう見てもこの穴に体を嵌めて「体験」というこ  
とだろう。

ソファの位置的に、壁に嵌まっているとそのソファに  
お尻を向ける格好になるようだ。

しかし、私はその穴を見て一瞬怯んでしまった。

（ここに頭から体を入れて…、あ、壁からまた板が出てくるのか、これで固定するのかな？……クッションはついてるけど本当に身動きできない感じなんだ）

穴を覗くと分厚い壁の隙間からクッションのついたひと回り薄い板のようなものが見える。

体を差し込んでからこの調整板を出す仕様のようだった。

それから穴の向こうを覗くと同じような部屋があった。向こうも誰もいない。

（そういえば体験ってどう体験するんだろ、サイト見たときは相手の男の人がいるっぽかったけど。後から入って来るのかな、それってこのスタッフ？それともお客さん？）

今さら湧いてきた疑問を頭の中で巡らせていると、

「それではこちらにどうぞ」

さっきカウンターで対応してくれたスタッフが冷めた口調と共に指先をその穴に向けた。

（ここまで来ちゃったらもうやるしかないんだし…！）

私はごくりと唾を飲み込んでその穴に体を差し込んだ。

まずは頭から、それから体を斜めにして肩を片方ずつ通して胸までを通す。

胸の下、五センチくらい通った頃だろうか、

「では固定しま——」

「え、はい？」

スタッフの声が途中で小さくなって私は思わず振り返った。

…声が小さくなったはずだ、調整板が下ろされ私の上半身と下半身はいま完全に別の部屋にある。

下半身のあるさっきまでの部屋の音は聞こえなくなってしまったのだ。

「ひえ～～……………、なにこれえ…変なの」

誰もいない上半身側の部屋に半分笑い声のような声が響く。

前屈みになって壁に固定され、上半身と下半身が別々の部屋にいる自分の格好がとんでもなく滑稽だった。

…それと同時に下半身のあまりの無防備さに緊張してきた。

「いま向こうの部屋どうなってるんだろ、さっきのスタッフさんってもう出てったのかな。誰か入ってきても分かんないな、——あっ？」

突然誰かが私のお尻を触った。

下着の上から大きな手のひらが突き出したお尻を撫でている。

「わ、わ、わ、こんな感じなんだ、壁尻って！」

誰かが部屋に入ってきた音は聞こえなかった。

声も足音ももちろん聞こえない。

でも誰かにお尻を触られている。

素肌の腰の辺りから下着の上、お尻の丸みを確かめる

ようにいやらしく撫でている。

どこを触られるか予想も予測もできない状態で触られるのは正直くすぐったかった。

「…あれ？」

その手が途中で増えた。

二つならまだ分かる。でも二つどころじゃない。

お尻と、それから太もも、膝、足首に足の指まで。

「なんか…たくさんいる？え？そっちの部屋どれだけ人がいるの？」

手がいくつあるのか分からない。

くすぐったくて動かさずにはいられない足にいくつもの手が滑っている。

向こうの音がろくに聞こえないんだからこっちの声もちろん聞こえないだろう。

私の独り言には誰も返事なんかしてくれなかった。

「あ…、あっ」

滑っていた手が足の間、下着のクロッチのところまで進んできて私は覚悟を決めた。

「さ、さわられ、……あっ」

布の上から割れ目をなぞり始めた指。

初めは優しく、それから布を軽く押しながら。ほんの少しの摩擦でそこは熱くなっていく。

「ッあ、」

すり♡

すり♡

すり♡

布が割れ目に添って張り付いてしまう♡

すり♡

すり♡

すり♡

何度も往復する指にくすぐったい感覚は消えていって、

すり♡

すり♡

すり♡

その布が湿っていくのを感じた♡

「あ、は…♡やば、これ♡」

体の中のチリチリと疼く感覚に、私は壁に手のひらを押し付けて体勢を整えた♡

足も軽く開いたまましっかりと床につける♡

すると他の手がお腹の辺りから下へ降りていって、

さりっ♡

下着に上からクリトリスを掠めた♡

「……っ♡♡」

全く触られてもいなかったそこを布と皮の上から触れられて一気に熱が増す♡

足がピクッと揺れて、私はそこを差し出すようにそのまま固まった♡

それを察したかのようにその指はクリトリスに狙いを定めてくれた♡

さり♡さりさり♡さりさり♡

「あっ♡あ♡あ♡それ♡」

さりさりさり…♡さり♡さり♡さり♡

「いい♡布ごしやばい♡クリ勃っちゃう♡」

さり♡さり♡さり♡さり♡さり♡

「あ～～…♡クリ♡いたい♡ビンビンになってる♡」



さりさりさりさりさりさり……♡♡♡

「あっ♡♡あ♡は♡あう♡あ♡♡」

向こうの部屋に聞こえないことをいいことに私は好き  
勝手に声を出した♡

そうすると余計に気持ちが高揚、下半身に血が巡って  
いくようで♡♡

さりさりさりさりさりさりさり…♡♡♡

「ふッ、う~~~~♡♡♡♡」

クリトリスがまるでちんぽみたいに、ドクドクと強調  
して膨らんでいく感覚がする♡♡♡

そこを姿も見えない人に擦られている♡♡♡♡

私が足がピンと突っ張らせたのがバレたのか、クリト  
リスを擦る指と割れ目を往復する指は規則的な動きにな  
った♡♡

すりすりすりすりすりすりすり♡♡♡♡

さりさりさりさりさりさりさり♡♡♡♡

「あッ♡♡あ♡♡は、アッ♡♡…っ、————♡♡♡

♡」

イかせようとしてる♡

イきそうな把握されちゃってる♡♡♡

すりすりすりすりすりすりすりすり♡♡♡♡

さりさりさりさりさりさりさり♡♡♡♡

しつこくそうされて、私はお尻を突き出したまま膨らんだクリトリスともうぐちょぐちょに濡れてしまっているおまんこの入り口に意識を集中させた♡♡

すりすりすりすりすりすりすりすり♡♡♡♡

さりさりさりさりさりさりさり♡♡♡♡

「…………♡♡♡♡うあ♡♡イク♡♡これイっちゃう♡♡  
見えないところでクリ触られてイク♡♡♡♡…………っ  
っ、あ、ああああッ！！♡♡♡♡♡」

腰が固定されているせいでビクつくことすらうまくできなかった♡

前屈みのまま下半身だけをカクカクと痙攣させる♡♡

♡♡♡

「う♡あ、……、イっちゃったあ♡♡♡」

力んでいた足から力が抜けていく♡♡

向こうにいる彼らも私がイったことは察したのだろう、  
一度全ての手が離れて足が開放された、けれど、

「あ、」

一気に下着がずり下され思わず顔を上げた♡  
片足ずつ掴んで下着が抜き取られ、間髪入れずに、

ぶぢゅッ♡♡♡

何か湿ったものが私のおまんこを覆った♡♡

ぶぢゅ、ぶぢゅ♡♡

ぢゅる♡♡ぢゅ〜〜〜〜……っ♡♡♡

「あっ♡♡ん♡ッ♡♡イったばっかなのに♡♡そんな♡」

割れ目ごと全て覆われている♡

誰か知らない人の口であろうそれはときどき舌を蠢かせながら私のおまんこに吸い付いていた♡♡♡♡

「あッ♡♡ん♡♡♡ん♡♡あぁっ♡♡」

覆われたおまんこのすぐ上でクリトリスがその刺激に  
ビクビクと震えてしまう♡

そのほんの小さな痙攣にすらまた快感を拾ってしまっ  
て私はまたお尻を突き出した♡♡

ぢゅるっ、ぢゅぶぢゅぶっ♡♡

ぢゅぶぶぶッ♡♡♡ぢゅっ♡♡ぢゅっ♡♡ぢゅっ♡♡

「っ♡♡あ♡♡は♡♡あ♡あ♡だめ♡またきもちよく

、」

ぢゅ〜〜〜〜〜っ♡♡♡♡ぢゅ〜〜〜〜〜〜〜  
〜っ♡♡♡♡

「あ、あ、あ、あっ♡♡♡すわないで♡♡あんっ、振動、  
が♡♡♡♡♡」

ぢゅぶっ！♡♡ぢゅぶっ！♡♡ぢゅぶっ！♡♡ぢゅぶ  
っ！♡♡ぢゅぶっ！♡♡

「あッ♡♡あぁあっ♡♡あ、ん♡♡あっ♡♡あ、あッッ  
♡♡♡♡」

イってすぐの敏感になっているそこを、暖かくて湿っ  
た粘膜が揉み込みように吸い付いて♡

その中で舌は褓を辿るように舐め回しときどき先端を

挿入してくる♡♡

その間にもまだいくつもの手が足をいやらしく撫でていた♡♡

ぢゅっ♡♡ぢゅっ♡♡

ぶぢゅ、ぢゅるるるるっ♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッ♡♡♡♡

そこに押し付けられた顔が更に強く押し付けられ、振動を与えるように横に振られる♡♡

おまんこ全体を包む粘膜が吸い付いたままそうされると中に差し込まれた舌がおまんこの壁に当たって、それも気持ちよくて♡♡

「だ、だめ♡♡またきもち、よく♡♡…っう♡♡……あ、ん、んッ♡♡♡♡」

私の声なんて聞こえていないその口は、ひたすらそうして私のおまんこを刺激してきた♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッ♡♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッ♡♡♡♡

「ッあ、あ♡♡あ♡♡♡おまんこ♡♡♡ぶるぶるきもちいい♡♡これ、また…！♡♡♡」

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッ♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッ♡♡♡

「…………ッ♡♡♡♡い、く♡♡イくからあ…！♡♡♡♡…………ん” あ、ああああッ！！♡♡♡♡♡」

また、足がガクガクと震えた♡♡

私がイってるの、気付いているはずなのに彼らは止まらなかった♡♡

吸いつかれているおまんこの入り口の上、きっと膨らんだままのクリトリスを誰かが指で挟んだのだ♡♡♡♡

一番敏感なところをそうされて私は思わず爪先立ちになってしまう♡♡

「…………ッ！！♡♡♡♡な、なに♡♡なにをするの、」

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッ♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッッ♡  
♡♡♡

おまんこは誰かの口で振動させられたままだ♡♡  
その状態のままクリトリスを挟んだ指は、

こりこりこりこりっ♡♡♡♡こりこりこりこりこり  
こりっ♡♡  
「.....〜〜〜〜！！♡♡♡♡♡♡♡」

左右にクリトリスを捏ねた♡♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッッ♡  
♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッッ♡  
♡♡♡

こりこりこりこりこりこりっ♡♡♡♡こりこりりこ  
りこりこりっ♡♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッッ♡  
♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッッ♡  
♡♡♡

こりこりこりこりこりこりっ♡♡♡♡こりこりりこ  
りこりこりっ♡♡♡♡

「あゝ ツツ、あああ！♡♡あっ、や、あゝ、あッ♡♡♡  
イ、ったばっか、なのにい！♡♡♡うあ、あああッ、  
あああッ！！！！♡♡♡♡♡」

制御できない快感に足が更にガクつく♡♡

すると今度はそれまで足全体を撫で回していた手の感  
触が変わった♡

多分舌だ、濡れた舌先がいくつも私の皮膚を這い回っ  
ている♡♡♡

連続でイカされて敏感になった薄い皮膚をくすぐって  
いる♡♡♡

「やああッ、あああッ、あゝ、あ〜〜〜〜っ！！♡♡  
♡♡♡やだあ、またイクっ！♡♡♡イクイクイク！  
！♡♡♡♡♡——うあゝ、あゝ……………！！！！♡♡♡  
♡♡」

壁が音を立てるほど体が揺れた♡♡♡

それでも止めてくれない♡♡

今度は前屈みになっている下腹部に柔らかい髪が触れ  
てそこに誰かが入ってきたのが分かった♡♡

その人は指先で私のクリトリスの皮を剥くと、



れるれるれるれるれるるっ♡♡♡♡♡  
「ひ、……………！！♡♡♡♡♡」

思いっきり生クリトリスを舌で弾いた♡♡

れるれるれるれるれるるっ♡♡♡♡♡  
れるれるれるれるるっ、ぺるぺるぺるぺるぺる  
ぺるっ♡♡♡♡♡

顔の角度を変えあらゆる方向に高速でクリトリスを弾  
いている♡♡

「あ、ッ♡♡あ、ア あ あああっ！！♡♡♡♡  
♡」

その間もおまんこを覆っている口は愛液を溢さず吸う  
ように蠢かせながら顔を左右に振り、いくつもの舌は滴  
る汗を辿るように滑っていた♡♡♡♡

「あ♡♡♡あ♡♡は、アああッ♡♡きもちいいの、  
おわんない、ずっときもちいい…！♡♡♡おまんこずっ  
ときもちいいよお…！！♡♡♡♡」

誰もいない部屋で声が反響した♡♡

視界には誰もいないのに下半身はきっとたくさんの人  
に弄られている♡♡♡♡

その状況が私を煽っていく♡♡♡

壁についていた手で上半身を支え、爪先立ちのままお腹の下を力ませた♡♡

ぐっ♡と力を入れるとクリトリスが敏感になって、おまんこの中もはっきりと舌の感触を拾って♡♡♡

「あ♡♡♡ああああ、あ〜〜…………♡♡♡♡♡」

気持ちいい感覚が足の先から迫り上がってゾクゾクする♡♡♡♡♡

その感覚がおまんことクリトリスで増幅して頭のとっぺんまで埋め尽くしていく♡♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッ♡♡♡

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッ♡♡♡

れるれるれるれるれるれるッ♡♡♡♡♡べろべろべろべろべろべろべろべろッ♡♡♡♡♡

「あ〜〜〜〜♡♡♡♡♡あ〜〜〜〜〜〜…♡♡♡♡♡イク、またイケちゃう♡♡♡♡♡きもちいい♡♡♡きもちいい♡♡♡きもちいい♡♡♡」

ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッッ！



ぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶぢゅぶッッ！



べるべるべるべるべるべるべるべるッッ！♡♡♡♡♡  
べるべるべるべるべるべるべるべるッッ！♡♡♡♡



「ん」お……………！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

あまりに大きな絶頂感に上半身が弾けるように跳ねた



足は小刻みに震えクリトリスはトクトクと脈打っている♡♡

「き、きもちいい……♡♡♡♡…んあ♡♡あ…♡♡♡  
♡」

うっとりと目を細め、下半身の余韻を味わっていると



——ガチャッ

壁の隅のドアが開いた♡

すぐにそこからは男の人たちが入ってきた♡

「ごめんね～♡ほんとは対面はダメなんだけど」

「こんなの我慢できるわけないって♡」

「いっぱい気持ちよくしてあげるからね♡」

二十代後半くらいだろうか、三人の男の人たちが壁に嵌まったままの私に近付いてきた♡

この人たちがさっきまで私の下半身を触っていたのだろうか？でも手や舌の感触を考えるともっと、……

そこで、

ぬちゅ……♡♡♡

腰を掴まれたかと思えばおまんこに何かが入ってきて私は胸をそらせた♡♡

「……お♡♡♡ほ♡♡♡♡」

まだ向こうの部屋に人がいる♡♡

やっぱりこの三人だけじゃなかったんだ♡

お尻に肌の感触♡

入ってきたのはちんぽだろう♡♡

硬さと暖かさが奥に押し込まれてお腹の奥からじわあ

♡♡と気持ちいい感覚が広がった♡♡♡♡

そのちんぽはすぐに遠慮なく動き出した♡♡♡

ぬちゅ、ぬちゅ♡♡

確かめるように奥を押し、

ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡ぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡

引いて押して、引いて押して、掻き回して、

ぬぽっ、ぬぽっ、ぬぽっ♡♡♡♡

入り口で抜き挿しする♡♡♡♡

「ん♡♡お♡あ♡♡♡っは♡♡」

「いい顔するねえ、えっろ♡♡♡♡」

「えっちなこと大好きだからこんなところ来たんだろ？♡♡」

「じゃあもちろん乳首も触られたいよね♡ほらあ、下向いてしょぼりしてる♡♡勃たせてあげないと♡♡」

ちんぽに意識を持っていかれている私の上半身の下に  
二人がしゃがんだ♡

体を振っていたせいでブラジャーからこぼれていた乳  
首が触られてしまう♡♡

その期待で今度はそこに意識が集中していく♡♡

二人は前屈みになって下向いた乳首を迎え入れるよう  
に舌を伸ばした♡♡

そして、

れ……♡♡♡♡♡

「……ッ♡♡♡♡♡」

まだなだらかな乳首を下から上へ舐め上げ、  
れ～…♡♡♡♡

今度は上から下へ♡

「ふっ♡う♡♡♡うう♡♡♡」

むくむくと乳首は勃起上がり、  
れるお♡♡れる♡♡

そのままゆっくり上下する舌に引っかかる♡♡♡♡  
れる♡♡れる♡♡れるお♡♡

「あ♡♡お♡♡♡お、ん♡♡」

二つの小さな勃起から上半身へ走る気持ち良さに悶え

ると、

…れろれろれろれろれろれろれろれろれろッ♡♡♡♡

「おッ、ほ♡♡♡♡お…ッ！♡♡♡♡」

その舌は上下するスピードを上げ、締めてしまったおまんこに、

ぬちゅッぬちゅッぬちゅッぬちゅッぬちゅッぬちゅッ  
ぬちゅッ♡♡♡♡

「お♡♡♡おッ♡♡♡お♡♡お”ッ♡♡♡♡んおおッ♡♡」

我慢できないといった様子でちんぽがピストンし始める♡♡♡♡

れろれろれろれろれろれろれろれろれろおッ♡♡♡♡♡

れるれるれるれるッ♡♡♡♡れるれるれるれるれるれる  
れるれるッ♡♡♡♡

すっかり勃起上がってしまった乳首を細かに舌で弾かれ♡♡

ぬちゅッぬちゅッぬちゅッぬちゅッぬちゅッぬちゅッ  
ぬちゅッ♡♡♡♡

乳首への鋭い刺激で締まるおまんこを抉じ開けるようにちんぽが前後に動く♡♡♡♡

「お”ッ♡♡お♡♡♡ん♡♡♡ッあ♡♡おあああ”ッ♡

♡♡♡あッ、あ♡♡」

後ろから突かれ揺らされる体、行き場のない手はもう  
一人の男の人に絡め取られた♡♡

しっかりと恋人繋ぎのように握り込んで私の顔に顔を  
近付けてくる♡♡

「気持ちいい？♡♡」

「き、きもちいいッ♡♡♡」

「どこが気持ちいいの？♡♡」

「…ち、ちくびも♡♡おまんこもきもち、……ッ”♡♡  
♡」

ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ  
ッッ！！♡♡♡♡♡

ふと、ピストンが早くなった♡♡

腰を掴む指の力が強くなって細かに奥に当たって、私  
のお腹の中もそれにじんじん♡と熱くなっていく♡♡♡

「ん”♡♡お♡♡♡おっ♡♡♡おッ♡♡♡すご♡♡♡♡ち  
んぽ♡♡はやい♡♡♡♡お”♡♡♡お♡♡♡」

ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ



ッッ！！♡♡♡♡♡

ぬぢゅ…………！！♡♡♡♡♡♡

思いっきり奥に押し付けられて、  
中でちんぽが脈打っている♡♡イってるんだ♡♡♡♡  
その間も私は乳首を舌で弾かれ続け、手を繋いでく  
れている男の人は私の頬やこめかみ、おでこと小さくキス  
している♡♡

ずる…っ♡♡♡♡♡  
「…、♡♡♡」

落ち着いたちんぽが抜けていった♡♡  
追い詰められただけでイけなかった私のおまんこが一  
瞬寂しくなって、でも、

ぐぢゅ…！！♡♡♡♡♡  
「お” ……！！♡♡♡♡♡」

すぐに硬くて太いものが突き込まれた♡♡  
一気に開かれるナカに体が震え上がる♡♡♡♡♡

「お、お、お……ッ♡♡♡♡♡」

そしてそのちんぽはすぐに動き出した♡♡

ぱんっ！♡♡♡ぱんっ！♡♡♡ぱんっ！♡♡♡ぱんっ  
！♡♡♡ぱんっ！♡♡♡

さっきの違うところを突いてくるちんぽ♡♡

きっと向こうの部屋にもまだ何人か人がいるんだ♡♡



■続きは製品版にて♡